
神選 ~ GotRing ~

時雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神選（Got Ring）

【Nコード】

N0942D

【作者名】

時雪崩

【あらすじ】

神が選んだ指輪・・・それは少しの人間にしか使えない特別な指輪その指輪の使用者のスバル今ここに始まる神選の話！！！！どうぞよろしく！！！！

part 1 始まり？

1 始まり？

この世界は神がまつわれていて信じる者は信じたり、妖精がいたり、仙人がいたりなどまあ変な世界です。

人間は働いたり、狩に行ったり、商売したりなど色々頑張ってます
王は国民のためにたぶん色々頑張っています

ちなみのこの物語の主人公？はそうこの俺スバルだ。

年は15歳、身長はちょっと小さめの160cm、得意なことは勉強などのめんどくさいこと意外のことなんでも好きだ、まあいたってどこにでもいそうな子供です。

俺の家は神社で父と母と兄とじいちゃんの5人暮らしです。

毎日お父さんからみっちり神社関係のことを、仕込まれているけど、ほとんどサボっています。

なぜかとゆくと、それは2つ理由があるんだけど、1つ目は、俺には兄がいるからいちを、俺はあとを継がなくて良いってこと。

2つ目は、じいちゃんが俺を旅に出したくて、毎日俺はじいちゃんの剣の稽古にも頑張っています（旅は出たいけど魔物とかおるからなるべくは行きたくないけど・・・）

まあそれも、4日後に迫った、俺の15歳の誕生日で行くか行かないかが決まります。

それまではゆっくりすごしたいと思います。

次の日

朝起きると家族が全員居間でご飯を食べていた。

「おはよう、ご飯出来とるよ」

母がそうゆつてきた。

それにつられてみんなが「おはよう」といつてきた。

そして俺も「おはよう」といつた。

母がご飯を持ってきた。

スバルの大好きなご飯は和風だ。

スバルは魚の骨まで食べた。

スバルが食べ終わると、父が「明日の朝に家族会議をするからなるべく早くかえって早く寝なさい」といつてきた。

「はい」といつてスバルは外に出た。

スバルの家はつきに1回家族会議が開かれる。

スバルは靴を履いて外に出ると、そこには友達のサクが立っていた。

サクはスバルと同じ年で、身長は170cmくらいで俺よりでかい。

サクの家は紋印術もんいんじゅつがともうまい家で有名だ。

紋印術とはまあ紋印を書いたらそれなりのものが出るというものらしい。

まあとにかく魔法が使えるということだ。

おまけにサクはすごく頭がいいなぜか知らないけどものすごくいい、でも運動のほうはあまり良いとはいえないけど・・・

賢者様に未来をかける男とかゆわれたりもしたらしい。

でも村の人が旅に出るといつてもまったく旅に出る気はないらしい。

まあ俺の1番の仲良しの友達だ。

「おいサク遊ぼうぜ」

サクは振り返ると

「何だスバルか」

「なんだよのりわりいなあ」

サクはため息をつく

「遊ばないんだったら帰るよ」

スバルはニコと笑うと

「じゃチャンバラしようぜ」

サクはまたため息をつく

「いや、スバル強すぎだもん」

「じゃなにしたいんだよ」

今度はサクがニコと笑うと

「昼寝」

「つまんねえじゃん昼寝とか」

サクは頭をかくと

「もーいいよチャンバラで」

スバルはニコニコして

「じゃ木刀持ってくるな」

「じゃ僕は先に広場にいつとくよ」

「おう、わかった」

スバルは木刀をもって5分後スバルは広場に行った。

広場にはサクが座っていた

「ほらよ木刀、ちゃんと手抜くからよ」

サクは立ち上がると

「わかったよ、まいったってゆったら負けだよね」

「おうじゃ始め」

2人は木刀を振り始めた

『バキ カン 痛 まだまだ ウラァー カン ボコ ボコ まい
った』

まいったとゆったのはサクだった。

サクの頭の上には小さいタンコブができていた。

「痛って、やっぱり負けたじゃないかだからいやだったんだよう」

サクはちよつとすねている

「まあそうゆうなよ結構お前強くなっていたぜ」

「はいはい、どうもありがとう。で、どうするのもう1試合？」

「うーんお前もついやだろ。次はお前に任せるよまかせる」

「じゃ野蛇草原で昼寝」

スバルはサクの機嫌を直すために昼寝に付き合うことにした。

「わかったたよ、じゃ行こうぜ」

サクはさっきまではすねていたけど昼寝となるとニコニコしていた。

2人は木刀とヘルメットを元に戻してから野蛇草原に行った。

「相変わらずここ寒いな」

「そうかな？ 僕はいいところだと思うけど・・・」

サクは横になると

「じゃさっそくお休み」

サクは3分もしないうちに寝てしまった。

イビキもかかず爆睡している。

スバルは寝ようとしたけど、なかなか寝られなかった

「どうしよっかな、どこかウロウロしにいこっかな」

スバルは考えて草原をウロウロすることにした

「サクは2時間後におきるとしてあと2時間どうしよっかな」

するとスバルの昔の記憶に竹やぶが創造された

「そうだ、あの竹やぶに行こう 修行できるかもしれないし」

スバルは草原の端っこにある竹やぶに行った

part 1 始まり？（後書き）

初めて書いたのであまりいい作品じゃないかもしれませんがこれからも頑張っていきたいと思うのでよろしく願いします

part 2 神の指輪（前書き）

スバルが暇で竹やぶに入ちやいます
そこでであつた人は・・・

part 2 神の指輪

2 指輪

中に入ると竹がいつぱい生えていた

「ここ修行できそうだな。何か切る物ないかな？」

スバルは切る物を探すために、竹やぶの中をどんどん進んでいくと一軒のボロボロの木造の家が建っていた

「そうだこの中に切る物があるかもしれない。ここ誰もいないみたいだし」

スバルは家の中に入ると予想道理、中には誰もいなかった

床や壁もあちらこちら壊れていた

「ボロボロだなこの家」

文句を言いながら家の中をうろろろすると、戸の間から光が漏れている部屋があった

「幽霊じゃないよな・・・」

スバルはそこに恐る恐る入っていった

その光の部屋に入ると1つの仏壇があった

仏壇には光る箱が飾っていた

「よかった、幽霊じゃなかった。でも何だこれは？」

スバルはその箱に手を触れようとすると

「誰じゃそこにおるのは」

スバルの心臓が止まるかと思うくらい大きな声だった

「はいー」

裏声だった

「そこにおるのは誰じゃ素直に出て来い。出てこないのじゃったら殺すぞ」

スバルは手を上にあげ、ゆっくり声のほうに出て行った
そこにはいかにもおじいちゃんって感じの人がいた

白いひげを生やし頭の毛はつるつるで服も茶色い服を着ていた

「ほう餓鬼が何のようじゃ」

「えーっとちよつと迷子になって、ちようど家があつて、のどが渴いて飲ましてもらおうかなあつておもつて・・・」

スバルは思いつきり嘘をついていた

「それなら何で、台所にいないのじゃ」

おじいさんは鋭かった

「えーっとものすごい光を放っているところがあつたので気になって・・・」

これは本当のこと

「何じゃ、あの指輪が光っておるのか」

おじいさんはビクリしていた

「ちよつと、その餓鬼こい」

（餓鬼はひどいよ・・・）

「はい」

声は小さかった

スバルはポツポツと歩いた

おじいさんが光る部屋の中に入ると

「これは驚いた、指輪が光っておる。いつから光っておつたのじゃ。」

「わかりませんけど」

「そうか、ついに来たのじゃな。ほれこの指輪を持ってかえりなさい」

スバルの手に指輪の入った箱が乗せられると光は収まった。

「この指輪はお前にあげよう」

スバルはちよつと驚いた。

「この指輪はなんですか？」

「わしもしらん。でも昔、来た旅人にもらつてこうゆわれた」

『この指輪が光ったらその人は継承者です。継承者がきたら何事も無く指輪をあげてください。そして利き手の人差し指にはめるようにいってください。あと他の指輪も集めてください。最後に、この指輪はインパクトだ』とゆってこの家を後にしたんじゃ。

「まあとにかく指してみなさい」

スバルは左利きなので左の人差し指に指輪をさした。

指輪は黄色でもきれいな指輪だった。

「よく似合っておるの。指輪の意味はわからんがずっと持っていれば何か分かるかもな。じゃサヨナラじゃ」

「ちよつとまってください。この指輪どうしたら良いんですか？」

「わしもわからんのじゃ。まあ後は頑張ってくれ。あとその指輪売ったりするのではないぞ」

そうゆうとおじいさんは違う部屋に行ってしまった。

スバルの頭の中は真っ白になった。

でもしょうがなく外に出た。

真っ白の状態だった。

でも頭の中にサクのことを思い出した。

「そろそろサクの所かえってやらないと、あいつ悲しむだろうな、よし行くか」

スバルは走ってサクの所へいった。

サクのところにつくとサクはまだ寝ていた

「サク、そろそろおきないと、夜寝れなくなるぞ」

「ふぁおはよう。何時間くらい寝てた？」

「うーん2時間30分ってとこかな」

「そつかじゃかえろつか。ふぁー」

「そうだな」

「あれ？スバルその指輪どうしたの？」

サクは寝起きでまだボーっとしていた

スバルはさっきのことを話した

「へえ変わってるね。なんだろうねその指輪？」

「さあ、何か『この指輪はインパクトだ』らしいぜ」

「ふふふふ変だね、まあ僕の家の本で調べてみるよ」

「おう、頼む」

2人は話しながら家にかえった。

スバルの家の前に着くと

「じゃあな」

「うんバイバイ、ちゃんと調べてみるね」

「おう、頼む」

そうして2人は別れた

part 2 神の指輪（後書き）

やっと第二部ができました

第三部はいつになるかわかりませんが楽しみに待っていてください
！！

part 3 会議（前書き）

なぞの老人に光る指輪をもらったスバル
さてその指輪の意味とは・・・

part 3 会議

スバルはサクと遊び、つかれきって飯も食べず眠りについた

次の朝

スバルは起きると太陽が差し込んでいた

「うわあ、まぶし」

スバルは着替えて布団をたたむと、居間では会議の準備をしていた
スバルは朝ごはんを食べるために、台所に行った

「おはよう、何か張り切っているね、お父さん」

スバルはご飯を作っていた母にゆった

母もゆった

「そりやそうよ、スバルの将来が今日決まるんだから・・・それより
ご飯食べなさい」

今日の朝ごはんも和風だった

いつもどおり魚の骨間で食べ終わるとお父さんが

「おっ、スバル、おはよう。そろそろ会議を始めるから顔を洗って
きなさい」

スバルは「はい」といって顔を洗い居間に行った

「スバルが来たから、居間から会議を始めるぞ」

父がそうゆった

あたりの空気がしーんとなった

「えーっと今回の会議の内容だが、明日のスバルの誕生日だ。やつ
と15歳になる。15歳とゆうのはしってると思うが、手に職をつ
けなければいけない年だ。だから今から将来のスバルの職について、
話し合うがいいか？」

「はいはい、わかってるよ」

兄が疲れたようにいった

「といつても、手に付ける職は大体決まっている。1つ目は、この神社を継ぐためにここで働く。2つ目は、旅に出る以上だ。他に何かあるか？」

「ないな」「そうねないわね」「ないのお」

兄と母とじいちゃんはそうゆった。

「じゃ話は早い、今から多数決を取るが、スバル何か無いか？」

スバルはものすごく緊張した。

「ないよ」

(いよいよ決まる明日から新たな一日が始まるんだ・・・)

「じゃ多数決をとる・・・」

父がそついいかけたとき

「ちよつと待つのじゃ」

じいちゃんがそうゆった。

「スバル、お前の左手についてるその指輪は、どこで手に入れたのじゃ？」

スバルの耳元で、驚くようにじいちゃんがそうゆった。

「どこでつて、昨日、野蛇草原の竹やぶの中の家の人に、継承者がついに来たーみたいなことゆわれて、もらったんだよ」

「何？継承者？」

じいちゃんは困った顔を見ると、大きな声で言った

「ちよつとスバル、外に出なさい。後、会議は一時中断じゃ」

スバルはじいちゃんにゆわれたとおりにしぶしぶ外に出た

「いいか、今からゆったことをするのじゃぞ、口答えもなしじゃぞ。いいか指輪を付けた手で、地面に手を付けて『インパクト』とゆうのじゃ。簡単じゃろ」

スバルは色々反抗したかったけど、止めてその代わりに、ため息をついた

「わかったよ　じゃいくよ」

スバルは手を地面につけて『インパクト』といった
そうゆうと指輪からものすごい威力が伝わってきた
地面には半球の跡がついていた

「なっ何だこれ！！！！」

スバルは今日第二回目の腰が抜けそうになった

「その指輪はのお、神の指輪とゆつての、神の指輪に選ばれたもの
にしか使えん特別な指輪なんじゃよ」

「おじいちゃん知ってるのこれ？」

「知ってるも何もその指輪はわしの親友が残していったものじゃ」

「は？」

「は？ではないその指輪は親友が残していったものなんじゃ」

「は？」

「じゃからは？ではない。わしの親友が、旅人の終止符を打つため
に人にやったのじゃ。でもこれで、スバルは旅を出なければならん
ことになったのじゃ。ほれ、家の中に戻るぞ」

スバルとじいちゃんは家の中に戻った

家に戻ると、兄はダラアーとしていた。でもすぐに止まっていた
会議が始まった

「どこに行つてたんだ？」

兄がそうゆつてきた

「それはわしが説明しよう。スバルは旅に出ることに決まった以上
じゃ」

「なんでですか？とおさん？」疑問風に父がじいちゃんに聞いた
「ほれ、スバルの左指を見ればわかる」

父はふつと、スバルの左手の指輪をみると

「そうか、そうゆうことか。分かった、スバル頑張つてきなさい」
と父がゆった

スバルはキョトンとした

「意味がわかんねーよ」兄がそうゆった

「意味はな、スバルは神に選ばれた、それだけのことだ」

じいちゃんが兄を説得するようにいった

「何で神に選ばれたんだよ？運動しかできないスバルが、何でだ？じいちゃん」

「神に選ばれた理由は誰も知らなんのじゃよ。知ってるのは神のみじゃ。選ばれる人は100年に15人選ばれるらしい。スバルは、その一人に選ばれたとゆうことじゃ。選ばれた人は絶対に、旅に出なければならんのじゃ。そして、神のいる場所に行かなければならんのじゃ。だから、旅に出なければならぬ。それでスバルを旅に出すということじゃ」

兄は、まだ納得はしてなかったみたいだけど、座り込んだ

スバルはさつきじいちゃんがゆったことで気になることがあった
「ねえじいちゃん、聞きたいことがあるんだけど、どうしたら、神のいるとこにいけるんだよ？」

「神のそこには、わしの親友のゴルゾがしっておったかもしれん。あいつは、本が大好きじゃからの。旅に行く途中、モリビアの街にいて、ゴルゾに聞きなさい。ゴルゾ宛に手紙を書いとう」

「いつ旅に出ればいいの？」

「明日じゃ」

「明日は早いよ」

「何が言おうとも明日じゃ」

スバルはため息をついた

「じゃ今から、荷物をまとめてきてやろう。スバルはそれまで、どこか行つて追つていいぞ」

（何か邪魔者みたい）

「わっかたよ、じゃサクのところに行つてくる・・・そうだ、一緒にサクも旅に連れてつていい？」

「それはわしにとつても願いたいことじゃが、あ奴、旅に出るきないじゃないか。それはあ奴に聞いてみなさい」

「おう、わかった。じゃいつてくる」

スバルは活きよい良く家を出た

サクの家は、スバルの家の近くの、裏山に立っている

スバルの家の2倍はあるうかと思うくらいすごくデカイ

スバルは走ってサクの所に行った

サクの家に着くと、サクはいつもどおり裏庭にゴザをひいて、そのうえに寝ていた

「サク、起きろ」

サクはびくとも、しなかった

スバルはニコとすると

「サク、お前の足に鼠がいるぞ
すると

「うわぁーーーーー」

サクは驚くようにおきた

サクは鼠が大の苦手なのだ

「なんだよ！！スバル！！人が気持ちよく寝てたうえに、脅かすなんてひどいよ」

サクは怒っていた

「まあ、ごめんごめん。それはそうと俺と旅に出ないか？」

「はあ？なんで？」

「俺、明日から旅に出なくちゃならなくなつたんだよ」

「ふうーん、よかったね、行ってらっしゃい」

「なんだよ、もっと深入りしてくれたって良いじゃないか」

「だって僕旅に出る気ないもん」

「何で旅に出ないんだよ？」

サクは頭をかくと

「それはスバルと同じだよ。スバルも昔この僕たちのすんでいるとこが魔物に襲われたことくらい覚えてるでしょ」

その襲われたときにサクのお母さんとおねえちゃんが亡くなった。それ以来サクは魔物が怖くなっていた。

「確かにあれは俺たちが5歳のころのことだからよく覚えているよ。あの魔物のせいで多くの人がなくなった。俺のばあちゃんもなくなった。けどさ、その魔物がきても追い払えるくらいになつてけば、この村で死者も少なくなると思うんだ。俺も旅に出るのは怖いし、かつてに旅に出るってゆわれたけどさ、誰も死ななくていいように、強くなればいいとおもうんだよ。だからさ、サク一緒に旅に出ようよ」

サクは黙り込んでしまった

「少し時間をちょうだい。ちゃんと明日には返事を出すからさ。」

そうゆうとサクは自分の家に入っていた

「わかったまってるぜ」

スバルはそうゆうと、サクの家を後にした

part 3 会議（後書き）

やっと第三部です

さて今回の話は会議です

さてその会議の意味とは・・・

part 4 準備（前書き）

いよいよ準備に入ったスバル
鞆に色々詰め合わせ旅に出る用意をした
さていよいよ旅か・・・

part 4 準備

夜

スバルの家では旅の準備が始まっていた

「よいなスバル。この袋は木の実などが入っておる。そして、この本とペンはお前が書いたことが、わしが持つておる、この同じ本にかかれる。何か旅の途中に聴きたいことがあれば書くといい。そしてこれは・・・なんじゃったかの？」

「それは、ゴルゾさんあてに書いた手紙でしょ」

父があきれたように行った

「そつそつじゃったの、別にわざとボケただけじゃ」

じいちゃんの額には冷や汗をかいていた

「この手紙を、モリビアの町に図書館がある。そこにおけるゴルゾつて言う人にこの手紙を渡しなさい。力になってくれると思うぞ!!」

「おう、分かった。てかさ、モリビアの街ってどこにあるん？」

「ここから3、4時間くらい歩いたとこじゃ。魔物もおるからきをつけていくのじゃよ」

「うっうん」

スバルは魔物にビビッていた

「そついえば、サクはどうするって言っておたのじゃ？」

スバルは振り向くと

「えっ！まだ分からないって。明日には返事出すって・・・」

「そうか・・・おつと、そつじゃった、これは魔物にあつたとき用の剣じゃ。スバルが練習の時に使っていた剣じゃ。使い慣れているじゃろ」

「えー！・・・じいちゃん、旅に出る時はじいちゃんの「時風」ときなまくれ

るっていつてたじゃん」

「まだスバルはお子ちゃまじゃからまだやれんの」

スバルはじいちゃんが使っていた『時風』がかっこよくて代々受け次がれていく物らしく

スバルの父はじいちゃんが剣の稽古を付けたらしいけどある病気にかかって剣の修行をやめたらしい。だからスバルの父は剣をつけなくてスバルに回ってきたらしい

「じゃどうしたらくれるんだよ」

「それは・・・兄のランと勝負をしてもらっ」

スバルは驚くように

「でも兄ちゃんは剣の修行とかした事ないよ」

じいちゃんは頭をかくと

「じゃからスバルに一回でも攻撃くらったら負けとゆうルールでじや」

「あっそうかごめんごめんむきになって」

「わかればよろしい」

「じゃいつはじめるんだよ!？」

じいちゃんはニコと笑うと

「今日の夜じやいいな」

「おう、わかった」

「スバル」

声が聞こえるとお母さんが袋をもっていた

「これをもっていきなさい」

スバルは袋の中を開けると木の板が入っていた

「これ何？」

「これは官印といってね、彼方のおばあちゃんからもらったものなの。お守りとして持っていていきなさい。それと、それは色々な街や国でつかえるから大事にするのよ」

「うん、大事にするよ」

そうゆつと官印を袋に直して鞆に入れた

「これで全部じゃの　じゃ後は夜になるだけじゃ」
じいちゃんが眠たそうにいった

part 4 準備（後書き）

やっと本編に入れそうです
早く旅が書きたいので頑張ります

part 5 時風（前書き）

時風の跡継ぎで戦うことになったスバルとスバルの兄
さて戦いの行方は・・・

part 5 時風

夜

スバル一家の男子勢は庭に出ていた

「いよいよじゃの」

じいちゃんは何かニコニコしている

「そうだね、でも兄ちゃん戦えるのかよ？」

兄は振り向くと

「久しぶりだからわかんねえけど、まあできるだろ」

「えっ兄ちゃん稽古したことあるのかよ？」

「まあな。いちを兄だしな」

「意味わかんねえよ」

すると父が手をパンパンと叩くと

「はいそこまで。後はこの後の楽しみで」

「そうじゃの、そろそろ始めるとするかの」

そうゆうとじいちゃんは半径10mくらいの大きな円を地面に書き始めた

「二人とも木刀を持ってきなさい。あと準備運動もしっかりしとくように」

父が腕を組んでそうゆった

「おう、わかった。でもこんな兄すぐおわるぞ」

スバルは兄に対して挑発をした

「おいスバル、その言葉そのまま返すぞ」

兄も負けずといった

「まあ早く木刀を持ってきなさい」

2人は声をそろえて

「わかったよ」といった

2人は木刀を持ってくると地面にはきれいな円が書かれていた
「おっ来たな。じゃはじめるぞ」

「そうじゃの準備はよいな？」

「おう、ばつちりだよ。まあ、すぐ終わるさ」

「ゆってくれるな、でもお前一撃でもくらったら負けだぞ」

「知ってるよ」

「じゃそろそろ始めるかの、2人とも円の中に入りなさい」

2人は円の中に入った

「この円から出たら負けじゃ、それとスバルは一撃でもくらったら
まけじゃいいな」

スバルは息をスウーと吸うと

「おし、いくぜ」

スバルは気合を入れた

「俺もやるか」

兄も気合を入れた

「それでは、はじめ！！」

スバルは行き良いよく向かって行つた

兄も向かっていった

スバルと兄の木刀が触れ合った

2人は木刀で押し合った

「久しぶりだから力がいんねえ」

兄は歯を食いしばると木刀で振り払った

スバルは木刀を引いて態勢を整えて、すぐ兄に向かっていった
スバルは兄に向かいながらジャンプをした

2〜3mは飛んでいた

「ジャンプ力すげーな」

兄はスバルを見ていた

「じゃ次俺の番だな」

スバルは握った木刀を横向きにして顔の前に持ってくる

「いづくぜ、影討かげうち」

スバルはすっと消えた

「何？」

兄は辺りを見た

でもスバルの姿はなかった

「ここだよ」

兄は声のほうを見るがどこにもいなかった

「こっちだつて」

兄は後ろを見るとスバルがいた

スバルは木刀で兄の首本を叩いた

兄はそのまま気を失って倒れた

「勝負あり！！スバルの勝ち！！」

じいちゃんは大声で言った

父は兄の近くに行くと

「おい大丈夫か？ 蘭ラン？」

蘭とは兄の名前である

「んっん痛ててて」

父は倒れた兄に肩を貸して家の中に入った

「よくやったなスバル」

「まあ余裕だよこれくらい」

「そうじゃの。ほれこれをもっていきなさい」

じいちゃんはスバルに『時風』を渡した

「へへ、ありがとな、じいちゃん」

時風を持つと何かいい気分がした

時風の鐔つばにはとても美しい狐が彫られていた

「なあじいちゃんなんで狐なんだよ？」

「さあのなぜじゃかの」

じいちゃんは知らなかった

「まあ良いではないか」

「そうだね。ふあゝねむ」

「そうじゃのそろそろ寝るとするかの」

スバルとじいちゃんは家の中に入って眠りについた

part 5 時風（後書き）

後1話で旅に出れそうです

part 6 旅立ち（前書き）

兄との決戦を追え、旅立つことになったスバル。
家族に最後の別れを告げ旅立とうとしたとき・・・

part 6 旅立ち

朝

「スバルおきなさうい」

母の声で目が覚めた

目を覚ますとまぶしい日の光が射してる

スバルは起きて階段を駆け下りた

左手には「打の指輪」がついている

居間には兄以外全員いた

スバルはご飯を食べている途中スバルはふと思った。ご飯を食べるのはこの日が最後だってことに・・・

「おかあさん、おかわり！！」

「あら珍しいわね。スバルがおかわりだなんて・・・」

「まあね」

スバルはちよつと悲しかった

でもスバルはご飯を食べ終わると

「おいしかったよおかあさん」

といってスバルは食器をかたずけた

「スバルそろそろ旅立ちの日じゃぞ」

じいちゃんたちは外へ出て行った

いよいよ旅たちの日が迫った

スバルは鞆をかるい、腰には時風をさした

スバルは外に出て行った

そこには昨日まで伸びていた兄が、父の方を借りて来てくれていた
「頑張つてこいよ」

ちょっと嬉しかった

じいちゃんたちも

「頑張るのよ」

「頑張つてきなさい」

「頑張るのじゃよ」

といつてくれた

「うん、頑張つてくるよ」

スバルは最後の別れを告げ、行こうかなと思ったとき

「スバルーーーー！！！！」

と声が聞こえた

スバルは後ろを振り向くとサクが走つてこちらに向かつてきた

「サク！！！！ その格好はもしかしてついてきてくれるのか！？」

サクの格好は肩がけ鞆に紋印術を書くための杖を持っていた

サクは照れたように

「スバル一人だったらさすぐやられそうだからさお共してあげるよ。

おまけにまた魔物が来ても追い返せるように強くなりたいからさ・

・

「サク・・」

「よかったのスバル2人で頑張っていくのじゃぞ」

「うん」

「サクもスバルをよろしく頼むの・・・」

じいちゃんの顔には涙が今にもこぼれそうだった

「じゃ行ってくるよ」

スバルとサクは走って自分たちの故郷を後にした・・・

part 6 旅立ち（後書き）

いよいよ旅立ちます

次の話からは待ちに待った旅編です
どうぞ楽しみに待っていてください

part 7 サクの力（前書き）

いよいよ旅に出たスバルとサク
スバルがサクに気になることは・・・

part 7 サクの力

2人は出発して話しながらモリビアの街へ向かった

「なあサク紋印術ってどんな感じなんだよ」

スバルは聞いた

スバルはこの10年近くサクと遊んだりしたが、サクの紋印術は1度も見たことはない

「どんなって・・・そうだね今度から一緒に旅をするんだから教えても良いね」

スバルは頭の中で紋印術を想像した

(きつとこうなんかドーンとかバーンとかなるんじゃないかな)

意味がよくわからない

「そうだねどこから話そうか。紋印術ってのは精霊とかと契約をして、その精霊の能力出す『紋』もんをそれにあったように書くとそれなりのことができるってな感じかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「スバルわかった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「わからないみたいだね まあ見せてあげるよ」

ちよつと自慢そうな言い方だった

そうゆうとサクは右手に持っていた杖で直径1mくらいの円を書いた

「これが主になる円(別名 陣)この中に色々書くんだよ」

サクは円の中に『V』を書いて、さらにAの真ん中の線が無いやつを重ねるように書いた

「これが氷系紋印術『ソルド』だよ」

サクは円の中を軽く叩いた

そうすると円の周りから凍っていった

「うおーすげー」

「まあこんなのが紋印術だよ」

「ほかにはねえのか？」

「他つてもう書かないけど、火の『プロミネンス』 炎の『コロナ』

大地の『メザイア』

水の『レイラ』 引力の『スーラ』 さっき使った氷の『ソルド』

そして最後に光の『ミーナ』があるよ」

「へえすごいなお前。でも、火と炎って一緒じゃねえのか？」

「違うよ。火より炎のほうが階級が上なんだ」

「階級？」

「これは簡単に言えば威力の違いだよ」

「へえお前、紋印術使っているとかつこよく見えるな。いつつもスー」寝ているからさ勉強しか出来ないと思ったけどよ。色々できるんだな」

「余計なお世話だよ。それより早く進まない？日が暮れたら魔物がいっぱい出てくるし、スバルもゴルゾってゆうひとにも会わないといけないんだよ」

「そういえばそうだったな。じゃいくか」

2人はモリビアの街へ向かった

3時間半ほど歩くと、街らしきものが見えてきた

「おいアレじゃねえか？」

「たぶんね」

2人はついにモリビアの街に着いた

part7 サクの力（後書き）

やっと旅編です

やっと書けるのでとてもわくわくしています

どうぞお楽しみに！！！！！！

part 8 モリビアの街（前書き）

旅に出たサクとスバル。サクの能力を見たスバルはとても驚いた。だが2人はいよいよ目的地のモリビアの街についたのであった。

part 8 モリビアの街

モリビアの街

「ここがモリビアかー」

モリビアの街は白を強調とした街で、中心では10〜20メートルあるかもしれない噴水があり、そこから水が流れていて、とてもきれいな街だった

「きれいなところだね。ここで昼寝したいよ」

「おいおい、それよりまずは図書館探して、ゴルゾさんに会おうぜ」
「わかってるよそれくらいスバルに言われなくても」

2人は人に聞きながら図書館を探した

「すみません図書館はどこにありますか？」

サクは親切な口調で女の人に聞いた

「図書館ですか？・・・図書館はここから右に行つて、真直ぐに行つたところにデカイ家が見えます。その左進むと見える木造の家が図書館ですよ」

「どうもありがとうございます。それでは・・・」

サクの笑顔で、女の人はニコと返してくれた

スバルたちは聞いた通りに進んだ

「でかい家つてどれだよ」

「たぶんこれだよ。ここを左にいったらあるんだつたんだよね」

「たぶんな」

進んでいった先には女の人がゆつたとおり木造の家が立っていた

「これか？」

「たぶん・・・」

その家はつたが絡んで緑と茶の2色しかなかった

「はいるんだよね？」

「なにビビッてんだよ」

「別ビビッてはないけどいやな感じがするんだよ」

「ぐずぐず言わないで入ろうぜ」

スバルたちは木の扉を押して入った

「こんにちは。ゴルゾさんいますか？」

中は本本本でいっぱいだった

でも思ってたより明るく、人も何人かいた

「あのーすいませんがゴルゾさんはどちらにいますか？」

本を読んでいた人に聞いた

「ゴルゾさんですか？たぶんその扉の中にいると思うけど・・・」

2人はいわれた通りちよつとこぎれいな扉を開けた
するとそこには黒いひげを生やしたおっさんがいた

「あのーゴルゾさんいますか？」

「ゴルゾは俺だが」

ちよつとスバルはびびった

だってじいちゃんももうすぐ90歳なるかならないかのきわどい
所なのにそのじいちゃんの友達が3〜40歳のおっさんだったなんて

「俺になんかようか？それにここの人間じゃないな」

スバルは肩にかけてあった鞆を下ろしてじいちゃんからもらった
手紙をゴルゾさんに渡した

「なんだこれは？」

「えつとまあよんでください」

ゴルゾは手紙を読み出した

読み終わると

「なんだお前シラギの孫か」

シラギとはじいちゃんの名前だ

「はい」

「この手紙によるとお前『神選』に選ばれたらしいな」

「神選？」

あまり聴かない言葉だった

「神選とか聞いてないのか？」

「はい、まったく」

「シラギの奴俺に押し付けたな・・・まあいい」

「神選」お前みたいな神に選ばれた奴だ」

「それなら知ってます。10人しかいないんですよ」

「ああそうだ」

「そういえば、お前この手紙に書いてあったが何か聞きたいことがあるのか？」

ゴルゾはひげを触りながらきいた

「あつそうだったこの指輪なんですか？」

「おお懐かしいなそういえば『総将』の奴元気にしてやがるかな」

「あのおゝ昔話は良いですから教えてもらえませんか？」

「そうだったな。指輪は今この世界でなかなかない代物だ。お前の指輪は『打の神』がやどっている指輪だ。もう能力は使ってみたのか？」

「はい、家でじいちゃんに教えてもらいました」

すると

「あのー僕そつちで本読んでいていいですか？」
いいところでサクが口を挟んだ

「おういいぞ何か読みたい本はあるのか？」

「えーっと紋印術の本がありますか？」

「また懐かしい本だな。その本だったら管理人に「ゴルゾが特別室をあけるって」ってゆわれたって言つとけえそしたらかしてもらえるからよ」

「ありがとうございます。じゃ僕はここで」

サクはでていってゴルゾとスバル2人きりになった

「えつとどこまではなしたけ？」

「えーっとどこからだっけ？」

「えへっへへへへ」

「はははっはは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「本当にどこからだっけ？」

「えーっと打の神の能力の話の途中からだったよな」

「お前はシラギにどこまで教えてもらったんだ？」

「えーっと発動させるには『インパクト』これだつてゆわれました
「ほーうそこまでか。なあスバルちよつと俺と手合わせしてみねえか？」

手合わせとはまあ簡単にゆうと軽い決闘みたいな感じだ

「手合わせですか？いいですけどゴルゾさん武器持つてるんですか？」

「武器か？お前くらいだったら武器なしで勝てるが手加減されるのが嫌いなんだつたら武器も持つてくるけどどうするか？」

「手加減されるの嫌いなんで武器持ってきてください」

「そうかじゃっ持つてくるが念のためにお前の相方もつれてきてくれ」

そうゆうとゴルゾさんは外に出て行った

part 8 モリビアの街（後書き）

投稿が遅くなりました すみません

さあいよいよモリビアの街につきました

次の話はまた戦いの話になるのでしょうか・・・

part 9 まじめなサク（前書き）

やっとモリビアの街についた、スバルとサク。

図書館に行き、ゴルゾと会い、色々なことを聞いたスバルだった。

ゴルゾは手合わせがしたいといい、することになったスバルだった。

part 9 まじめなサク

スバルはゴルゾさんにゆわれたとおりに図書室にいるサクを呼びに言った

サクは本棚の近くにいた

「おいサク今からゴルゾさんと手合わせするんだけどさ、ゴルゾさんがつれてこいってゆ

われたからさついてきてくれよ」

サクは読みかけだった本を閉じると「ちょっと僕も頼みごとがあるから良いよ」

スバルはちよつと驚いた

なぜかとゆうとサクがものすごくまじめだったからだ

いつもはふにやふにやしてるサクがとてもしりしい顔をしているからだ

「どうしたんだサク？りりしい顔して」

「ちよつとね。それより早くゴルゾさんに会えないのかな」

そのときギギイーと扉が開いた

「スバルいるか？」

大きな声だった

「館長静かにしてください」

受付に座っていたためがねをかけた女性が言った

「おおすまんなリリア」

「わかればいいんです」

リリアさんはため息をつくと椅子に座った

「スバル来い」

「だから静かに！！！」

リリアさんが切れた

「すまん」

ゴルゾさんが腰に引かれているようだった

「スバル行こうよ、はやく」

「そうだな、じゃいこうか」

2人は扉近くにいたゴルゾさんのところにいった

「またせだな、じゃいくぞついてこい」

ゴルゾさんについていった先は木も家もない土しかないグラウンドだった

「ちゃんと相方も連れてきたなそういえば相方の名前はなんてゆんだ」

「僕の名前は高上たかうえ 桜さくらです」

高上桜とはサクの本名でだ。

俺は桜の上の2文字を取ってサクといっている

「高上？・・・高上桜だな」

「はい、あっそうだった、僕お願いがあるんですけど、さっき借りた本をもらいたいんですけどだめですか？」

「そうゆうと思ったよ。だからお前を連れてきてもらったんだ。あの本は気に入っただろ」

「はいとても。でもあの本はタダではくれないとゆうことですね」

サクは真剣な顔だった

「おつ、お前賢いな。そうだ簡単には本はやれないな。まあなに安心しろ、あの本は値打ちが高くてな、軽く100万円以上の価値がある本だからな、払えってゆわれても払えなる・・・」

「100万円！！！！」

スバルの目が¥に変わった

「こら人がしゃべっているときに口をはさむな」

「はい」

「えーと本をどうやったら手に入はいるかだったよな。まあとっても簡単なことだ今からスバルと手合わせするがそのなかに桜、お前

もはいれ。まあようするに2対1つてことだ」

「手合わせの中に入ればもらえるんですか？」

「あ、そうだった。手合わせの中でどっちかが俺に傷つけるか、30分内でお前たちか気絶しなかったらお前にやるよ」

サクはニコニコして

「本当ですか？それだけでいいんですね」

「ああそうだ。なら話が早い。お前たち構えろ」

「ちよつとまって」

「わかった3分間やる 作戦でも考えろ」

サクがスバルの近くにきた

「スバル、あの本は絶対に手に入れたいんだよ。だから本気でいくよいいね。あと僕は遠距離でサポートするからさスバルは接近でがんばってね」

サクの目は本気モードだった

スバルもあんなにまじめなサクを見るのは初めてだった

「おおおう」

「なんだよ、いつものスバルでおつてよ。こっちも気が狂いそうになるからさ」

「だつてお前がまじめだからさ」

「おーいもういいか俺短気なんだよ」

「それじゃがんばろうね」

サクは手を振ってゴルゾさんのところにいった

「何か調子狂いそうだぜ」

スバルはボソツと言い捨ててゴルゾさんのところにいった

「じゃはじめるぞ。10秒後俺がコインを投げる地面にいったらはいじめだいいな」

「はいわかりました」

「おうわかった」

「じゃはじめるぞ」

「1、2、3、4、・・・」

サクは遠くに走った

スバルはサクとゴルゾさんの中間くらいにたった

「8、9、10 ピーン」

コインをはじき、地面に着いた

part 9 まじめなサク（後書き）

遅くなってしまうましたが、あけましておめでとございます
今年もよろしく願います

次の話はゴルゾとの戦いの話になりそうです

part 10 手合わせ（前書き）

モリビアの街についたスバルとサクだったが、ゴルゾと手合わせをする事になった。

サクは図書館で見た本がどうしてほしくゴルゾに頼んだが、はたして本もらえるのか？そしてゴルゾに勝てるのか？

part 10 手合わせ

コインが地面についた瞬間にスバルは腰に付けてあった時皿を抜いた

「じゃまずは小手調べ」

するとスバルはゴルゾに向かって一直線

「ほお真正面からか。まあいい来い」

スバルはゴルゾに向かって剣を振った

ゴルゾはひよいひよいと簡単によけてしまった

「剣の振りはまあまあだな。だかこれだけじゃ負けるぞ」

「うるせえ、まだまだこれからだよ」

だがゴルゾはスバルを持ち上げると、遠くへ投げ飛ばした

するとサクが

「僕を忘れないでくださいよ」

こん

サクは紋印術の上を軽くつついた

「くえ『コロナ』」

コロナの紋印術は陣のなかに『+』みたいな形が描かれていた

サクの描いたコロナの紋印術の中から火の玉が出てきた

その火の玉はどんどん分裂していった

ゴルゾは動く気配は無かった

「すげー」

スバルがゆった

そして火の玉が50個くらいになると

「行け、コロナ」

サクがそうゆうと火の玉は、ゴルゾに向かっていった

だが、スピードはあまり速いとはいえない

「何だこのしょぼい技は」

「しょぼくないですよ」

ゴルゾは向かってきた火の玉を避けた

「何だこれは？やっぱりしょぼいだろ」

「だから、しょぼくないですよ。後ろよく見てください」

ゴルゾは後ろを見た

「囲まれているな」

「そこらへん、酸素うすくないですか？」

「そうゆわれると・・・薄いな」

「早く出ないと死んでしまいますよ」

サクの笑みはちよつと怖かった・・・

スバルは、サクとゴルゾの戦いを見ていた

ゴルゾはポケットから手袋見たいのを出して、手につけた

「それでは、逃げますか・・・」

ゴルゾはボソと言い捨てると、ぶつぶつ何か言い出した

「外風の陣、いくつぜ」

ゴルゾの回りからものすごい風が生まれた

「はっ」

ゴルゾのまわりを囲んでいた火の玉が一瞬で消えてしまった

「嘘でしょ。一瞬で」

ゴルゾは唾を地面に吐き捨てた

「お前まだ甘いな、あと力がまだうまく操れていないな、精霊と話したことはまだ無いのか？」

「何のことですか？」

「だろうな」

するといきなり

「影討イ」

そこにはさつきまでぼーっとしていたスバルが上に飛んでいて、大きな声とともにゴルゾに向かって剣を振った
「なっ」

ゴルゾは驚くように急いで守りの体制に入った
スバルの剣がゴルゾに入るとゴルゾは軽く吹っ飛んだ
だが空中で体制を整えてまったくの無傷だった
スバルも空中で体制を整えて地面に着いた

「くっそ、あのままぶっ飛んどけば傷つけられて終わりだったのに・」

「やるなスバル。その技シラギのもんだろ。久しぶりにその技くらったぜ」

「サクいつまでぼーとしてるんだ。早く紋印術描けよ。」

「まってよ。今から描くから時間稼ぎしてよ」

「わかった。はやくしろよな」

「うん」

スバルは時風を力強く握りしめた

「いくぜえ!!! 影討」

スバルは空高く飛び上がった

「懐かしいなその技、確かその技はジャンプをして自分の剣に乗り、そこからまたさらにジャンプする、だから倍近くの跳力が生まれる。だか跳ぶだけじゃ意味は無いぞ」

スバルは剣をゴルゾに向けて振った

「くらええ」

「じゃ俺も行くぜ!!! 俺流、真剣白刃取しんけんしろはとり」

ゴルゾはスバルの剣を両手で取ってしまった

「まじかよ」

スバルは剣を抜き取ろうとしたがなかなか抜き取れなかった
「これだったら意味ないだろ」

「何で白刃取りをするんだよ」

「馬鹿か攻撃をとめたといえ止めたといえ」

「サクまだかよ？」

サクのほうをスバルが振り向くとゴルゾのパンチが飛んできた
パンチは穂に当たった

スバルは10m位飛ばされた

「手合わせ中に敵から目を離すな！！！！本当の戦いだったらお前す
ぐに死ぬぞ、やる気が無いのなら指輪を捨てて帰れ！！！！」

「スバル！！！！」

スバルは気絶した

サクが心配そうに見ていると、ゴルゾがサクの後ろに素早く回り
こんで来て、首の後ろをたたかれサクも気絶した

「はあやっぱりだめか・・・。こいつら鍛えねえとあのときのこと
がまた再び起きてしまうかもな・・・」

ゴルゾは2人を抱えて日陰に運んだ

part 10 手合わせ（後書き）

やっと二ケタに入りました。
次の連載はまだ未定ですが、楽しみに待っていてください。

part 11 前夜（前書き）

ゴルゾに負けてしまった、スバルとサクだった。
目を覚ますと辺りは夕方だった。

part 11 前夜

しばらく時間がたって、スバルは目を覚ました

あたりは夕方だった

「いててここは・・・どこだ？」

隣には気持ちよくサクが寝ていた
するとゴルゾがスバルたちに来た

「おっおきたか」

「起きたけどここは？」

「お前、気絶して俺がここまで運んできてやったんだ」

「気絶？俺が？」

「そうだ気絶だ」

（うぁじいちゃんにきかれたら雷が落ちるだろうな・・・）

スバルはボソと言った

「そうだった、お前の荷物の中に通信本があるだろ？それをすまん
が出してくれ」

「通信本って何？」

「お前シラギからもらっただろ本を・・・」

「あぁー！！！」

スバルはちょうど近くにあった荷物をとってきて本を出した

「はいこれですか？」

「おおこれだこれちよつと借りるぞ」

「別に良いですけど・・・」

「じゃすまんがちよつこら席はすすぜ」

そうゆうとゴルゾは出て行った

スバルはサクがおきるのをまっている
でもなかなかサクはおきなかった

サクは死ぬようにぐっすり眠っていた

スバルはちよつと悪戯いたずらしてやろうと思った

「サ・ク・ね・ず・み・が・あ・た・ま・の・う・え・に・い・ま・
す・よ」

サクの返事はなかった

ちよつとスバルはむきになって、大声で言った

「鼠！！！！！！！」

サクは飛び跳ねるように起きた

「スバル！！！！鼠どこ？！」

サクはスバルにしがみ付いて聞いた

「嘘だよ、サク」

スバルは軽く笑った

サクは怒って杖を手に持った

「馬鹿スバル」

サクは杖でスバルを殴った

スバルはそのまま、倒れこんでしまった

そのころゴルゾは自分の家に帰って、通信本でスバルのじいちゃん
んと連絡を取っていた

「久しぶりだなシラギじつはな・・・」

part 11 前夜（後書き）

最近、勉強でなかなか更新できませんが、がんばっていききたいと思っています。

応援よろしくお願いします!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0942d/>

神選 ~ GotRing ~

2010年12月25日18時29分発行